

都立高校生の進路選択過程に関する継時的研究 —進路多様校やエンカレッジスクール等を事例として—

○古賀正義（中央大学）

牧野智和（日本学術振興会）、松田恵示（東京学芸大学）、山田哲也（一橋大学）、山本宏樹（東京理科大学）

1. 問題設定：学校タイプと中退問題

筆者らのグループは、2012 年に「都立高校中途退学者継続調査」を東京都教育委員会と連携して実施した。この調査は、2010-2011 年度に都立高校を中途退学した者全員に郵送でアンケート調査を実施し、特に中退前後の学校・家庭生活等の事情や中退後の就学・就労等の進路選択の実態を把握しようとしたものであった（宮本 2012）。

有効回収率が 20.4%とかなり高く、また 50 名ほどへの追跡インタビュー調査を併用したこともあり、「学校不適応」の原因理解に力点を置きがちな従来の中退研究の成果とは異なり（乾ほか 2012）、退学後の支援を前提とした中退経験者のライフコースに関わる新たな知見をえることができた。

具体的には、①中退の主たる理由として、勉学の進捗・意欲というよりむしろ、学校を中心とした「対人関係」や「生活リズム」の不具合があげられやすいこと、②中退後すぐに次の進路に向かうのではなく、比較的長期のインターバル期間（学習も就労もしない期間）が存在すること、③支援機関の利用は相対的に低く、経済的支援を求める声強いものの、「就労」指向の中退経験者よりも「学習（就学）」指向の中退経験者の方が従来型の相談中心の支援を活用する度合いが高いこと、などが指摘できた（古賀 2014a、2014b）。

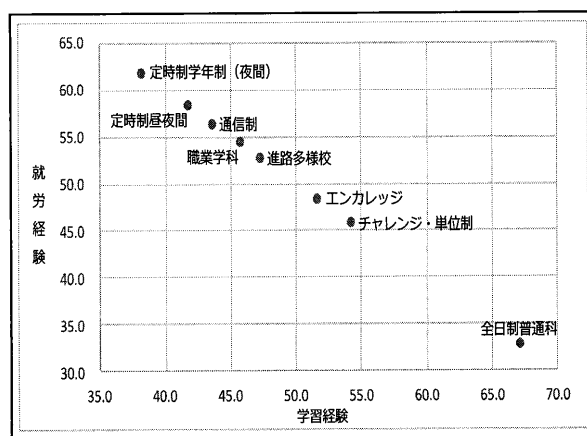
特に、退学以降の進路選択が「就学」中心になるか「就労」中心になるかは、在籍した高校のレベルや設置学科・全日制／定時制の構成等によって大きく異なることがわかり、また、退学直後と調査時点（退学時期によって異なるが 1 から 2 年間余後）を比較すると、ほとんどの高校で、「就労」への指向がしだいに強まっていくこともわかった。

さらに分析を進めるため、中退率や中退理由等の違いが大きい 8 タイプの高校群を、調査戦略上の意図に沿って設定してみた。現在都立高校は、90 年代に導入された総合学科、単位制高校などだけでなく、30 分授業や少人数習熟度別授業が選べるエンカレッジスクール、不登校経験の生徒を受け入れることが多いチャレンジスクールなどさまざまな形態の高校がある。

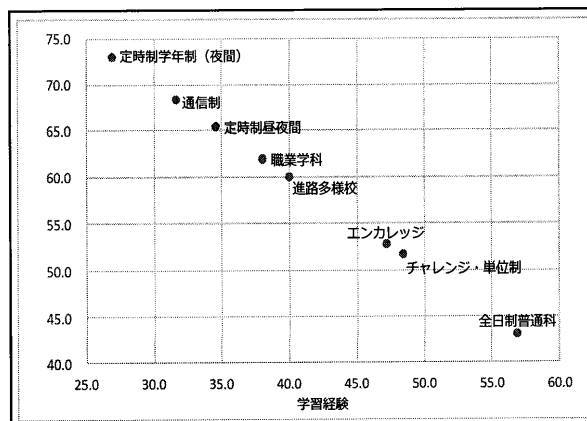
これに合わせて、①エンカレッジスクールを

除いた、「全日制普通科・総合学科の高校」。その全日制課程の中で調査の対象となった 2010、11 年に退学率の平均を大きく上回り進路未決定者も多い 20 校を選別し、②「進路多様校」と称した。さらに、③先の「エンカレッジスクール」、④「チャレンジスクール・単位制高校」という特色ある高校群。一般に 3 部制と称される、⑤「定時制昼夜間」と、⑥「夜間の定時制学年制」。さらに、⑦工業や商業などの「職業学科」高校、⑧「通信制」高校を分類してみた。

図表 1、2 は、中退後の進路選択を「学習（就学）」指向と「就労」指向に大別し、8 タイプ別の構成比を示したものである。ここでも、「学習」指向の強い全日制普通科高校、「中間的」な指向の進路多様校、エンカレッジ、「就労」指向の強い定時制学年制や昼夜間などの違いが明瞭である。



図表 1 退学直後における学校種別学習・就労状況 (%)



図表 2 調査時点における学校種別学習・就労状況 (%)

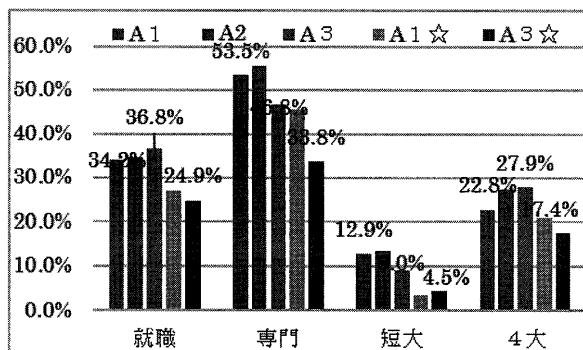
2. 進路多様校やエンカレッジスクール等を事例とした在学時の継続調査

そこで、貧困等の若者の地域課題を抱える都内の2地区を選び、中退率が高い進路多様校、エンカレッジスクール、定時制学年制を選別し（ただし、1地区については職業学科高校1校を含むため、計7校）、入学時から3年間にわたる継続調査を実施してみることにした。

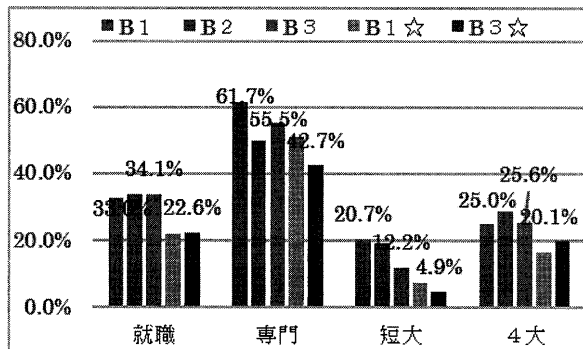
調査は、1年次2回、2年次1回、3年次2回（定時制は別）の5回となり、中村ら（2010）が行った学校別のパネル調査のフォーマットを参考にしている。調査内容は、学校生活の評価、進路に関する理解、友人関係・アルバイトや価値観、家族関係などに及び、インタビュー調査も順次併用する予定である。

すでに2013年度入学者については2年次3回目までを実施しており、比較のため、2014年度入学者についても1年時1回目を夏休み前に実施し継続する。長欠者等も少なくないため、13年度対象者全体では、1回目1079名、2回目1005名、3回目1019名と、定時制を中心に入学時調査の5%程が調査から離脱している勘定になる。

結果の詳細は当日配布する資料によることとして、まずはその概要から興味深い知見をいくつかあげておくこととしたい。



図表3 X進路多様校の進路希望の推移



図表4 Y進路多様校の進路希望の推移

例えば、進路の選択について、「今考えている進路として何がありますか」（複数回答）と「一番希望している進路は何ですか」（単一回答＝☆印）の両方を、各回で質問している。図

表3、4（％は1、3回目と3☆回）にあるように、進路多様校の2校でみると、選択可能な進路から「専門学校」が大きく減少し、代わって「就職」「4大進学」が増加することがわかる。この傾向は、第一希望の進路においても同様である。しかし、「就職」「4大進学」とともに減少し絞り込みがみられるX校と、専門からの入れ替わりでともに増加するY校で異なった傾向もみられる。進路指導の影響もある結果だろうか。エンカレッジ各校が比較的高い比率の「就職」希望者を抱える（Z校＝A1時点で50.7%、W校＝同41.0%）のとも異なっている。

授業・部活動や対人関係、習慣形成など高校生活の14の項目についてみると、「病気の時以外は遅刻や欠席をしない」（全体結果「とてもそう」、A1時＝47.5%、A3時＝30.5%）や「宿題や提出物をいつもやっている」（同A1時＝32.3%、A3時＝24.3%）などが高い割合となり、求められている教育実践の質が垣間見える。また因子分析で負荷量の高い「自分のペースで学ぶことができています」（「とても」「まあ」、A1時＝19.2%&46.9%、A3時＝13.9%&44.7%）などの項目も高い評価となっている。

ちなみに、「学校は過ごしやすいですか」という質問に対して、進路多様校2校の比較結果をみると、「とてもそう」では大幅な減少がみられるようになっていた（X校A1＝22.1%→A3＝12.9%、Y校A1＝21.7%→A3＝9.8%）。また、「将来の進路に近づいていると思うか」では、「とても」「まあ」合わせた割合でやや減少していることがわかり（X校A1＝40.7%→A3＝38.8%、Y校A1＝40.2%→A3＝28.0%）、退学者の頻出ともかかわる課題があると思われる。

このように中退者の生成する（あるいは防止される）プロセスを学校・家庭等の生活の文脈に沿って理解することで、将来の有効な進路選択にとって必要な教育的資源を探求していくことがいま求められているといえよう。

参考文献

- 宮本みち子 2012『若者が無縁化する一仕事・福祉・コミュニティでつなぐ』筑摩書房
- 乾彰夫ほか 2012「高校中退者の中退をめぐる経緯とその後の意識に関する検討—内閣府調査（2010）の再分析」『教育科学研究』26集
- 古賀正義 2014a「液化化するライフコース—都立高校中退者調査からみた中退問題と支援」早稲田大学『社会学年誌』第55号
- 古賀正義 2014b「液化化するライフコースの実証的分析—都立高校調査からみた中途退学者の意識と行動」中央大学『教育学論集』第56集
- 中村高康編 2010『進路選択の過程と構造—高校入学から卒業までの量的・質的アプローチ』ミネルヴァ書房